令和５年度（２０２３年度）　学校評価シート

東海市立明倫小学校
住　　所　　東海市荒尾町土取１の１
電話番号　　０５２－６０３－２０１１　児童　２２５名
校 長 名　　長谷川　敦史　　１３学級　（特支４）

○ 教育目標
- 校訓「夢・汗・心」を柱として、「夢にあふれた　やさしい心と　さわやかな汗」を目指して、「知・徳・体」の調和のとれた児童を育成する。

○ 地域の特色
- 市内で一番児童数の少ない小規模校である。校内及び近隣には緑が多く、自然豊かな環境に恵まれている。市街地調整区域には一戸建て住宅が増えているが、団地・社宅等では子育て世代の世帯が少なくなっている。

◎…１０％以上贈　○…５％以上の増　△…５％以上の減

中期目標	今年度の目標	評価方法（アンケート項目）	結果の分析	課題と対応策	学校関係者評価【実施日】令和６年１月23日	来年度の改善策（誰が何をどうする）
知	・問題解決のために、児童がＩＣＴを活用するなどして、互いに教え合い、学び合うことができる授業づくりを実践する。 ・土台となる基礎学力の向上を図る。	○授業に関する項目 児童5「授業の内容は分かりやすい」 教師4「伝え合う活動を重視し、分かる授業を実践している」 教師11「子どもは、授業の内容を理解している」 保護者6「学校（担任・教科担任）は分かりやすい授業をしている」 ○基礎学力向上に関する項目 児童6「授業の最後に振り返りをすることで、授業で学んだことが身についてきている」 教師10「毎時の授業における振り返りの実践によって、基礎学力定着の成果を上げている」 保護者13「家庭学習の習慣を身に付けさせている」	○分かりやすい授業について 児童　73.6%　→　95.1%　◎ 教師　86.4%　→ 100.0%　◎ 教師　85.7%　→　94.5%　◎ 保護者　81.4%　→　80.4% **・分からないことを友達から教えてもらえる利点以上に、自分の考えをきちんと言語化することで、自身の理解度を明確にできる効果があった。** **・資料提示や意見交流でＩＣＴ機器の活用は有効。** ○基礎学力向上の取組について 児童　54.7%　→　74.2%　◎ 教師　86.3%　→　88.9% 保護者　72.8%　→　76.5% **・この授業の学びのポイントを最後に押さえる意識が高まった。** **・児童が自分の学びの成果と課題をつかみやすい。**	・ＩＣＴ機器を特別視せず、通常の文房具として捉え、活用していく。 ・思考の広がりや深まりを実現できる意見交流を活発化させる。 ・児童の文章読解力や自分の考えを論理的に組み立てる力を高めるために、授業の課題設定や教師の発問の工夫をしていく。 ・児童の主体的な学びが行われるように、児童自身が自分の課題をつかみ、意欲的に課題追究できるよう個別最適な支援をしていく。 ・今後も家庭へ協力を働きかけ、学習習慣の定着を図る。	・昨今の大学生は活字（メール等）の文化の中で生活しており、形式的な文章は書けても、自分の言葉で話して伝えることが苦手な傾向がある。小学生のうちから「話す」「聞く」活動を積み重ねていくことは、大変重要である。 ・他者に何かを伝えるときには、その後ろ盾となる多くの知識が必要である。伝える経験を積み重ねることで、知識の獲得や活用の必要性も実感するし、力も付いてくる。 ・自分の言葉で話せる子どもは、必ず伸びる。 ・文章読解力や論理的に話す力は、幼少期からの読書量がものをいう。音読も効果的である。 ・つまずきのある児童に対する家庭学習は、保護者と密に打ち合わせをして、個別に適切な質量を設定するのがよい。	・教務主任や現職教育主任を中心に、児童の思考力、判断力、話す力、聞く力などを高める学習の手だての研究や教員の授業力向上に努めていく。 ・各教職員が、ＩＣＴ機器を活用しながら、児童同士の活発な意見交流が繰り広げられる授業を展開していく。 ・読書の重要性に改めて着目し、図書主任を中心に、児童の読書意欲を高める取組を進めていく。 ・家庭学習は、将来に向けた自立的学習の実現に向け、各担任が児童一人一人の実態に応じた課題設定を工夫していく。
徳	・明るいあいさつができる心豊かな児童を育成する。 ・自他の命を大切にし、思いやりの気持ちをもって、人と接することができる。	○あいさつに関する項目 児童16「友達や先生、地域の人たちにあいさつをしている」 教師14「家族・地域の人にあいさつをすることを指導している」 地域７「本校の子どもたちは、地域であいさつがよくできている」 ○優しさ・思いやりの項目 児童8「困ったことがあったとき、相談したい先生がいる」 児童13「他の人をいやな気持ちにさせないようにしている」 児童14「困っている友達がいたら、助けている」 教師20「いじめ防止に努め、日頃から子どもの変化を見逃さないようにしている」 保護者11「明倫小学校子どものいじめ防止基本方針があることを知っている」	○あいさつについて 児童　91.5%　→　88.1% 教師　95.5%　→ 100.0% 地域　60.5%　→　77.2%　◎ **・児童の数値低下について、意欲はあるが実行に消極的な児童の背中を押す取組が必要である。** ○いじめに関する項目 児童　48.1%　→　62.4%　◎ 児童　　→　95.0% 児童　　→　92.1% 教師　100.0%　→ 100.0% 保護者　72.8%　→　74.5% **・ＳＣやＳＳＷとの連携強化、校内の情報交換会議や対策会議の充実が成果となって表れている。** **・小規模校の特性を生かし、全教職員が全児童の状況を把握し、対応できる体制になっている。**	・挨拶や感謝の意を表す具体的な言葉の指導をしたり、情操教育に取り組んだりする。 ・児童会主体のキャンペーン活動を展開する。 ・担任、養護教諭、ＳＣ、ＳＳＷなど児童が気軽に相談できる体制づくりと時間の確保をする。 ・情報交換会議や対策会議を形骸化せず、皆が意見を出しやすい運営の在り方にする。 ・年２回のいじめアンケートを始め、日頃から児童の人間関係や言動を注意深く観察し、組織的に対応する。	・友達や教師、家族には、しっかり挨拶をしている。子どもにとって近しくない地域の人には、挨拶は難しいのではないか。数値の低さも納得できる。設問を「地域の人」ではなく、「来校したお客さん」「交通当番の人」などに変え、近しく感じる地域の人を対象にした方がよい。 ・地域の不登校傾向の子どもに対して、近所に住む者としてどのように接したらよいのか悩む。 ・登校途中で長時間立ち止まっているなど、明らかに様子が心配な場合は別として、通常は自然体で挨拶や声かけをするのがよい。 ・自分の子どものトラブルのことで学校側と話をしたことがあるが、ほとんどの先生が知っていて声をかけてもらえた。多くの目で見てもらえる、連携していると知り、安心感が湧いた。 ・ＳＣ、ＳＳＷの増員をお願いしたい。	・全校体制で、良好な人間関係を構築する基本として、挨拶や感謝の意を示す言葉の指導や情操教育を進めていく。 ・児童にとって身近である学習支援や登下校支援などをしてくださる地域の方に焦点を当て、児童との挨拶や交流の輪を広げていくようにする。 ・担任、養護教諭、生徒指導主任、ＳＣ、ＳＳＷなどとの連携体制を一層強化していく。 ・小規模校の特性を生かし、全校で情報共有や対策共有ができる連絡体制を一層強化していく。
体	・汗をかくことを惜しまず、進んで体を鍛える児童を育てる。	○外遊びに関する項目 児童18「放課は、外で元気よく遊んでいる」 ・秋季・冬季における体力つくり ・持久走記録会、なわとび集会での記録 ・わくわくチャレンジタイムの取組 ○食育に関する項目 児童22「栄養バランスを考えて、好き嫌いなく何でも食べている」 教師29「給食の時間や授業で、食育を意識した指導をしている」 保護者16「学校が取り組む食育に関心がある」	○外遊びについて 児童　59.4%　→　62.4% **・熱中症対策のために外遊びを制限した時期もあったが、運動場で元気よく遊ぶ姿がよく見られるようになった。** **・体育的行事や業間体育を活発化した成果である。** ○健康な体づくりのための、食への関心について 児童　66.9%　→　78.2%　◎ 教師　95.4%　→ 100.0% 保護者　77.5%　→　86.3%　○ **・教師、保護者ともに食育への関心や実践が高まっているのは、数年来の取組の成果。** **・栄養教諭や担任の地道な言葉かけや雰囲気作りが児童の関心や実践意欲を高めている。**	・体育授業や体育的行事の更なる活性化を図る。 ・児童会が中心となり、ペア遊びや運動週間などの取組を更に活発化する。 ・体力の保持増進について、教師の研修会を開催する。 ・本校の食育の取組を継続し、ノウハウを引き継ぎ、職員や児童が入れ替わっても、食育指導を本校の特色ある伝統として根付かせていく。	・小学校の体育館の冷房設置を早くしてほしい。 ・６月中旬から９月末までにかけては熱中症の心配があり、体育の授業や体育的行事ができていないのではないか。カリキュラムがこなせているか心配である。	・教務主任や体育主任を中心に、気候を鑑みながら柔軟に単元の実施時期を入れ替えたり、他教科の学習時間と入れ替えたりして、取り組むべき運動種目が未実施にならないように工夫していく。 ・数年後には体育館に冷房が設置される見込みであり、体育主任を中心に、体育授業や体育的行事の計画について、発展的見直しを進めていく。
地域連携	・学校支援協議会と連携し、家庭・地域との絆を強化する。 ・地域の方々に学校教育に参画していただき、学校・家庭・地域が一体となって、地域ぐるみで児童を育てるとともに、開かれた学校づくりを進める。	○学校支援協議会に関する項目 教師26「学校支援協議会の組織や活動について理解している」 地域10「学習支援や花壇整備等、学校支援協議会が活動していることを知っている」 ○地域との連携に関する項目 教師25「地域の行事やボランティア活動に参加している」 保護者19「学校からの協力依頼があれば、できるだけ協力をしたい」 地域６「学校は、地域の活動や行事によく協力している」	○学校支援協議会の活動を理解 教師　81.9%　→　83.3% 地域　69.8%　→　84.1%　◎ **・Ｗｉｔｈコロナ時代の新しい活動の形を模索しながら実行し、徐々に浸透してきた。** ○ボランティア活動への参加 教師　77.3%　→　77.7% 保護者　69.5%　→　72.5% 地域　65.1%　→　75.0% **・勤務体制の工夫などにより、教職員も本校区及び自身の居住区での活動に参加しやすくなった。**	・Ｗｉｔｈコロナ時代の新しい活動として再構築したものを定着させる。 ・人的ネットワークを再強化するとともに、新たな人的つながりを探る。 ・学校だよりやＨＰ（明倫today）などで、ボランティア活動について広報するとともに、人的ネットワークを生かした口コミやeメッセージなどのオンライン機能の活用も行っていく。	・コロナ禍が収束に向かいつつあり、また感染症対策のノウハウも培われたので、今後の活動の充実に期待がもてる。 ・教職員の勤務時間外に電話がつながらないようになったが、例えば、地域の人が登校時間帯に児童のトラブル（けがや体調不良）に遭遇したときなど、学校とどのように連絡をとればよいのかが課題である。 ・eメッセージは、保護者にとっても大変便利。特に、時間に制約がある朝は、自分のタイミングで連絡を入れたり、確認をしたりできるのがよい。肉声でなければならない理由はない。 ・eメッセージを地域連携に活用できないか。	・学校支援協議会を通じて、新たに学校教育活動の支援をしてくださる方を「まちのせんせい」「サポートスタッフ」として募集し、人的ネットワークを広げていく。 ・教頭を中心に、eメッセージを始めとするデジタルシステムの地域連携への活用方法について研究していく。